翻　訳

イスラーム時代初期および中期におけるソグド地域の歴史地理

山　内　和　也※

※ 帝京大学文化財研究所

はじめに
第33章スグド

はじめに

本稿は、ル・ストレンジ、ガイ Le Strange, Guy 著の *The Land of the Eastern Caliphate, Mesopotamia, Persia, and Central Asia from the Moslem Conquest to the time of Timur*［東カリフ帝国の地、イスラーム教徒の征服からティームールの時代までのメソポタミア、ペルシア、中央アジア］Cambridge: at the University Press 1905 (Publications of the Institute for the History of Arabic-Islamic Science, Edited by Sezgin, Islamic Geography Volume 85, Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, Frankfurt am Main, 1993) の第33章をなす「スグド Sughd」、つまり「ソグド」の翻訳である。

ル・ストレンジはアラブ人地理家が残した地理書をもとに、イスラーム教徒［ムスリム］による征服以後、ティームール時代に至るまでのこのスグド地域の世界を生き生きと描き出している。この章には、2つの水系、つまりスグド川（現在のザラフシャーン川）とクシュカ川（現在のカシュカ・ダリヤ川）沿いに位置する街が含まれている。その代表的な街としては、ブハーラー（ブハラ）、バイカンド（ポイケント）、サマルカンド、カルミーニヤ、ダブースィヤ、ラビンジャン、キシュ（シャフリサブズ）、ナサフなどが挙げられる。基本的には、どれも現在のウズベキスタン共和国に位置していた街である。また、スグド地域の産物や幹線道路についても記述されている。本稿に記述されている街の中には、すでに失われて、その位置すら不明なものもあれば、現在に至るまで繁栄を続けている町も少なくない。

訳出にあたり、原書においてはアラビア語、ペルシア語、トルコ語の語彙はいくつかの記号を用いて転写されているが、本稿ではそれを簡略化し、一般的なローマ字で示してある。また、原文を損なわない範囲で、［　］を用いて最小限の訳注を加えてある。なお、ル・ストレンジ以降の研究成果、たとえば地理書に記述されている街の同定等については割愛した。

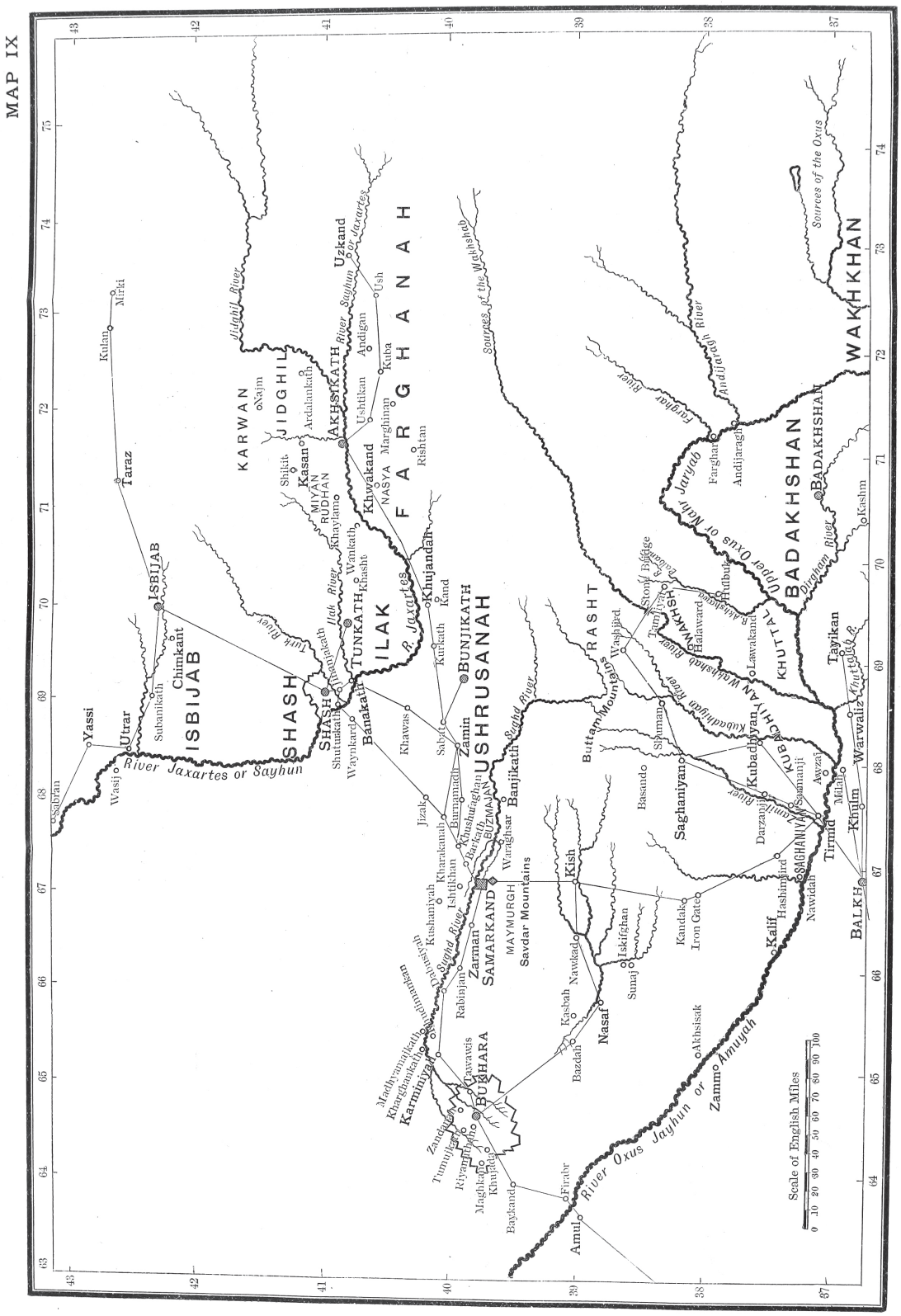
本稿がスグド、そして中央アジアの考古や歴史に興味を持っている方がたに広くご高覧いただければ幸いである。

第33章スグド

ブハーラーと［大］壁の内側の５つの都市。バイカンド。サマルカンド。ブッタム山脈、ザラフシャーン川、つまりスグド川。カルミーニヤ、ダブースィヤ、ラビンジャン。キシュとナサフ、あわせて近隣の［諸］町。スグドの産物。オクサス川を越えてサマルカンドに至る経路。

古代のソグディアナ Sogdiana であるスグド Sughd 州は、オクサス川とヤクサルテス川の間に位置し、２つの水系によって水が供給される肥沃な土地からなる場所であると理解される。その１つはザラフシャーン Zarafshan 川、つまりスグド Sughd 川で、その川岸にはサマルカンド Samarkand とブハーラー Bukhara が位置していた。もう１つはキシュ Kish とナサフ Nasaf の都市の傍らを流れる川である。双方の川とも、フワーリズムの方向、西方の砂漠の沼沢地や浅い湖へと消える。より正確を期すならば、スグドはサマルカンド周辺の地域の名称である；というのも、ブハーラーやキシュ、ナサフはそれぞれ別々の地域だとみなされたからである。

スグドは地上にある４つの楽園の１つだとされて



オクサス川とヤクサルテス川の諸州（Le Strange 1993: MAP IX）

いる。［ヘジュラ暦］３世紀（９世紀）の後半、サーマーン朝のアミールの支配下でもっとも繁栄していた；とはいえ、次世紀にあっても、依然として比べるものがないほど肥沃であり、かつ豊かな州であった。２つの主要な都市、つまりサマルカンドとブハーラーについていえば、前者はどちらかというと政治的な中心で、ブハーラーは宗教的な中心とみなされていたが、双方とも地位においては対等であり、スグドの州都であった。

ブハーラーはヌーミジカス Numijikath の名称でも知られていた。[原註460-1]［ヘジュラ暦］４世紀（10世紀）には、それ［ブハーラー］は壁で囲まれた都市で、いずれの方向にも差し渡し１リーグ［約 5.5 キロメートル］の大きさで、スグド川のおもな支流からほど遠くない南側の平原に位置していた。近隣にはまったく丘稜がなく、その周辺、長さと幅がともに12リーグ［約 66.7 キロメートル］の範囲にはたくさんの町や宮殿、庭園が集まっていた。さらには、周囲が 100 マイル［約 160 キロメートル］を超えていたに違いない「大壁 Great Wall」によって囲まれていた。数多くの水路とともに、スグド川はこの囲まれた広大な土地を流れていた。

ブハーラーの都市そのものには、北西の方向、壁の外側に隣接する城砦［ツィタデル］があり、それ自体、小さな都市のようであった。そこは支配者の居所で、牢獄と宝庫があった。また、町の外側と周辺にもたくさんの広大な郊外区［ラバト］があり、川の南岸に沿って、主たる支流に至るまで広がっていた。おもな郊外区は東側に位置していた。つまり、ナウ・バハール Naw Bahar、サマルカンド Samarkand、ラーミーサナ Ramithanah の街路（ダルブ darb）である。それに加えて、言及することができないほどたくさんの郊外区があったが、現在ではそれらの位置を正確に特定することはできない。都市の壁には７つの鉄製の門があった；バーブ－アル－マディーナ Bab-al-Madinah（「都市の門」）、バーブ・ヌール Bab Nur（もしくはヌーズ Nuz）、バーブ・フフラ Bab Hufrah、鉄門、城砦の門、バーブ・ミフル Bab Mihr もしくはバニー・アサド Bani Asad 門、そして最後にバニー・サアド Bani Sa‘d 門である。これらの門がどのような位置にあったかは不明であるが、城砦の門（バーブ－アル－クハンディズ Bab-al-Kuhandiz）は、北西側、非常に有名な広い砂地の平地、つまりブハーラーの公共広場であるリーギスターン Rigistan に面していたに違いない。

城砦の２つの門は、バーブ－アッ－リーギスターン Bab-ar-Rigistan、つまりバーブ－アッ－サフル Bab-as-Sahl（「（砂地の）平地の門」）、そしてバーブ－アル－ジャーミ Bab-al-Jami’ であった。この後者［バーブ－アル－ジャーミ］は、城砦の門と同じく、リーギスターンの傍らに建つ大モスクに面していた。10 の主要な街路が郊外区を横切っており、それぞれがその出入口［門］に通じていた。イスタフリーとムカッダスィーは、これらすべての名称を丁寧に記している。さらに、街路には郊外区のそれぞれの区画を閉鎖するための門があった。これらの門の多くは鉄製であった。大モスクは城砦の近くに位置し、より小さなモスクがたくさんあった。市場や公共浴場、数限りない広場があり、［ヘジュラ暦］４世紀（10世紀）の終わりには、政庁は、城砦のすぐ外側、リーギスターンと呼ばれる大きな広場に建っていた。イブン・ハウカルは、主要な［諸］運河について詳細に記している。これらの運河はスグド川の左岸から流れ出し、ブハーラーと都市の周辺の平原に広がる庭園を潤し、最終的にはアームル Amul 道沿いのバイカンド Baykand の近く、南西方向の砂漠に消えてしまい、そのどれ１つとしてオクサス川まで到達しなかった。［スグド］川の下流は、サーム・ハース Sam Khas もしくはフワーシュ Khwash として知られていた。[原註462-1]

イスラーム時代以前の古ブハーラーの廃墟は、ムスリム［イスラーム教徒］の都市の北西数マイル［数キロメートル］の川岸に位置している。この場所はリーヤーミーサーン Riyamithan の名称で知られている。［ヘジュラ暦］４世紀（10世紀）、ムカッダスィーは、依然として広大な古代都市の名残りをとどめていると記している。ブハーラーの平原を囲む「大壁」の内側には、５つの繁栄した都市があった。その中の１つであるフジャダ Khujadah もしくはフジャーダー Khujada は、ブハーラーからバイカンドに下る幹線道路の西１リーグ［約 5.5 キロメートル］、州都［ブハーラー］から３リーグ［約 16.7 キロメートル］に位置していた。ムカッダスィーによれば、それ［フジャダ］は大きく、心地よい町で、金曜モスクと城砦があった。マグカーン Maghkan の町はその向こう側、ブハーラーから５リーグ［約 27.8 キロメートル］、幹線道路から３リーグ［約 16.7 キ

ロメートル］、「大壁」の西側部分の近くに位置していた。マグカーンには金曜モスクがあり、防御が堅固で、郊外区があった。それに加えて、その土地が十分に灌漑されていたため、その周囲にはたくさんの村があった。

トゥムジカス Tumujkath もしくはトゥムシュカス Tumushkath（誤記のためにブムジカス Bumujkath、ブーミジカス Bumijkath と書かれることも多かった）は小さな町で、ブハーラーの北西４リーグ［約 22.2 キロメートル］の距離、タワーウィース Tawawis へ向かう幹線道路の左手、道から２分の１リーグ［約 2.8 キロメートル］外れた場所にあった。アッ－タワーウィース At-Tawawis（このように書かれることが多かった）は、「クジャク」を意味しており、「大壁」の内側にあった５つの都市の中でもっとも大きいものであった。その町には賑やかな市場があった。フラーサーン Khurasan のあらゆる場所からたくさんの商人が集まり、その綿織物はイラーク ʻIrak に輸出されていた。それ［アッ－タワーウィース］は十分に防御が堅固で、城砦があり、市場には金曜モスクが建っていた。［大壁の］内側にあった５つの都市の最後のものはザンダナ Zandanah で、現在でも存在している。ブハーラーの北、４リーグ［約 22.2 キロメートル］の距離に位置すると記されている。十分に防御が堅固で、町の中に金曜モスクがあり、［町の］壁の外側には、人口の多い郊外区があった；ここで織られ、町の名称に因んでザンダジー Zandaji と呼ばれた織物は広く賞賛されたと、ヤークートは付け加えている。

「大壁」の外側２リーグ［約11キロメートル］、ブハーラーからオクサス川［沿い］のフィラブル Firabr へ下る道沿い、５リーグ［約 27.8 キロメートル］の距離には、現在も存在しているバイカンドの都市がある。［ヘジュラ暦］４世紀（10世紀）、バイカンドには門は１つしかなく、強力に防御が固められていた；その［町の］中心には金曜モスクがあり、高価な大理石で飾られ、繊細に金彩が施されたミフラーブ（マッカの方向を示す壁龕）があった。バイカンドの郊外区では市場が開催されたが、町を囲む村は一切なかった；皆が報告しているように、1000 を数える多数の衛兵所のみであった。その町の外側には、オクサス川との境となる砂地の砂漠が横たわっていた。

初期中世時代を通して、ブハーラーはその傑出さを保ち続けた；しかし、［ヘジュラ暦］616年（1219年）、モンゴル人の侵攻を受け、都市は蹂躙され、完全に廃墟と化した。１世紀余りの間、それ［ブハーラー］はその打撃から立ち直れなかった。［ヘジュラ暦］８世紀（14世紀）初期、イブン・バトゥータがこの場所を訪れたとき、ファトフ－アーバード Fath-abad と呼ばれた郊外区に逗留した。モスクや神学校、市場はチャンギーズ・ハーンによって破壊されたままで、大部分はいまだに廃墟のままであった。［ヘジュラ暦］８世紀（14世紀）の終わり、サマルカンドを都としたティームールの支配下になってようやく、姉妹都市であるブハーラーはかつての輝きをいくらか取り戻した。[原註463-１]

サマルカンドは、［スグド川の］上流、ブハーラーの約 150 マイル［約 241 キロメートル］真東にあった；スグド川の南岸からやや離れて位置しており、高台に広がっていた。深い濠をともなう壁で囲まれた都市は、同じく高台にある城砦［ツィタデル］によって守られていた。下方、川岸の近くには広い［諸］郊外区があった。サマルカンドの周囲全体は、たくさんの果樹園、庭園を持つ［諸］宮殿で囲まれ、無数の水路によって灌漑されており、みごとなイトスギが生えていた。城砦の中には、支配者の宮殿、そして同じく牢獄が建っていたが、イブン・ハウカルは、この城砦の大部分は廃墟であったと記している；ヤークートによれば、そこ［城砦］には鉄製の２重の門があった。都市そのものには４つの門があった；すなわち、東のバーブ－アッ－スィーン Bab-as-Sin（「中国門」）で、低いところから階段で上るようになっており、そこから［スグド］川を見下ろすことができた；北はブハーラー門；西はバーブ－アッ－ナウ・バハール Bab-an-Naw Bahar で、同じく高いところにあった；南はバーブ－アル－カビール Bab-al-Kabir、つまり「大門」で、キシュ Kish 門としても知られていた。

ヤークートによれば、都市［サマルカンド］の広さは 2500 ジャリーブ jarib（約750エーカー［約３平方キロメートル］で、その範囲の内側には、たくさんの市場と公共浴場があった。個人の住居だけでなく、これら［公共浴場］には、バーブ・キシュ門を通る１本の鉛製の本管に繋がっている鉛製の配水管で水が供給されていた。その水は、地上の［地表面より高い］堤防に沿って［町の］外から引き込まれていた。また、市場の地区では、鉛製の配水管が

石製の台に載せられていたと記されている。サマルカンドの大市場はラース－アッ－タークRas-at-Tak、「アーチの頭（かしら）」と呼ばれ、素晴らしい広場であった。後代の政庁と金曜モスクはともに城砦のすぐ下方に建っていた。町の住居は、木材と日干しレンガで造られており、都市の人口はきわめて多かった。

サマルカンドの郊外区は川岸の低地部分に沿って広がっていた。長さ2リーグ［約11キロメートル］の半円形の壁が岸側を囲み、弓の弦のように、北側の川が防衛線を完全なものとしていた。郊外区の壁には8つの門があり、それぞれに街路が通じており、以下のように呼ばれていた；バーブ・シャダーワドBab Shadawad門、アシュバスクAshbask門、スーフシーンSukhshin門とアフシーナAfshinah門、都市と城砦が位置する高台に開いているバーブ・クーナクBab Kunak門、つまり「丘の門」、そしてワルサニーンWarsanin門、リーヴダドRivdad門、最後はバーブ・ファッルフシードBab Farrukhshid門である。郊外区の市場のすべての街路は、都市の内側にあるラース－アッターク広場に繋がっており、道は板石で舗装されていた。郊外区の市場は交易の中心で、あらゆる場所の商人と商品で溢れ、この都市［サマルカンド］はトランスオクシアナの一大商業中心地となっていた。商品の中でも、とくにサマルカンドの紙は東方［カリフ］世界を通じて有名で、その技術は中国から導入された。この土地の気候は湿潤で、都市と郊外区のいずれであっても、それぞれの住居には庭園があった。そのため、城砦の高さからサマルカンドを眺めると、1つの樹木の塊のようであった。南にはクーハク丘が聳え立ち、その向こうの山麓は、都市から1日行程内にあった。

トランスオクシアナ全域と同じく、サマルカンドは、［ヘジュラ暦］616年（1219年）に都市をほぼ壊滅させたモンゴル人が原因となって一時的に荒廃した；イブン・バトゥータは、次の世紀［14世紀］に訪れ、壁や門はなく、廃墟の迷路の中にある住居に人がいくらか住んでいると記している。［イブン・バトゥータは］ここにある川（スグド川の運河に言及している可能性がある）をナフル－アル－カッサーリーンNahr-al-Kassarin、つまり「縮絨職人の川」と呼んでおり、川岸には数多くの水車があった。このあとすぐ、［ヘジュラ暦］8世紀（14世紀）の末にはサマルカンドの栄光が蘇った。その頃、ティームールがそこ［サマルカンド］を都とし、町を再建した。［ヘジュラ暦］808年（1405年）、スペイン大使のクラヴィホは建設された大モスクと隊商宿を見ており、その中のいくつかは今日まで残っている。アリー・ヤズディーによれば、とりわけ、金曜モスクはティームールがインド征服から帰還した際に建設したもので、その壮麗さはこの遠征で持ち帰られた宝物のおかげであった。クラヴィホは、その当時、サマルカンドが土の壁で囲まれていたと記している；また、都市は、自分の故郷のセビリアよりも少し大きかったと述べている。[原註465-1)]

スグド川の東側と南側はもとより、サマルカンドの北側の周辺の地域もまた、すべてきわめて肥沃であった。バンジーカスBanjikathの町（現在のペンジャカントPenjakant）は、サマルカンドの東9リーグ［約50キロメートル］、川の南岸にあった。とりわけアーモンドとナッツを産する実り豊かな果樹園に囲まれ、運河沿いには穀物畑が広がっていた。ここ［バンジーカス］とサマルカンドの間には、ワラグサルWaraghsarという名称の大きな村と地域があった。サマルカンド周辺の土地を灌漑していた大部分の運河の［スグド］川からの取水口はここにあった。主要都市［都］の南側にはマーイムルグMaymurgh地域、サマルカンドから1リーグ［約5.5キロメートル］にはリーヴダドRivdad村があり、サンジャファガンSanjafaghan地域が隣接していた。肥沃さにおいては、サマルカンド周辺の土地でマームルグをしのぐ土地はない。素晴らしい樹木で有名で、端から端に至るまで数えきれないほどの村があった。この［マーイムルグの］南にはジバール－アッ－サヴダールJibal-as-Savdarと呼ばれる丘陵地帯があった。この地域はこの州でもっとも健康的な場所であった。イブン・ハウカルによれば、この地域のワズカルドWazkardと呼ばれる場所にはキリスト教徒－おそらくネストリウス派－に属する教会があり、たくさんの人が訪れるとともに、多額の収入を得ていた。山の［諸］谷は非常に肥沃で、水路によって十分に水が供給され、水路に沿って農園が存在していた；あらゆる種類の穀物がふんだんに栽培されていた。隣接するアッ－ダルガムAd-Darghamの地域の大部分は牧草地であったが、ブドウもたくさん栽培されていた。その境界にはアウファルAwfarもしくはアブガルAbgharの地域があった。多くの人口を持つたくさんの村があり、そ

れぞれ［の村］には幅２リーグ［約11キロメートル］の牧草地があって、家畜の大きな群れを飼養していた。これ［アウファル］が、サマルカンドと［スグド］川の南側の最後の地域である。

スグド川の北岸、ウシュルーサナ州の方向には、ブーズマージャン Buzmajan もしくはブーズマージャズ Buzmajaz 地域がある。その主たる町はバールカス Barkath もしくはアバルカス Abarkath であり、サマルカンドの北東４リーグ［約 22.2 キロメートル］、つまり１日行程にあった。さらに北へ４リーグ［約 22.2 キロメートル］〔＝12マイル＝約 25.5 キロメートル〕にはフシューファガン Khushufaghan があった。これは、後世にはラース－アル－カンタラ Ras-al-Kantarah（「橋頭」）として知られた重要な村である。そのさらに向こう側、ウシュルーサナとの境界近くにはブールナマズ Burnamadh もしくはフールナマズ Furnamadh 地域、そしてもっとも北にはヤールカス Yarkath 地域があった；双方とも、牧草地で有名であった。

サマルカンドの真北、７リーグ［約 38.9 キロメートル］にはイシュティーハーン Ishtikhan の町があった。［この町は］スグド川の運河の傍らに位置し、堅固な城砦と［諸］外郊外区［外ラバト］があった。その穀物畑は有名で、イスタフリーは、その肥沃さゆえに、「スグドの心臓」と呼んでいる。さらに北へ７リーグ［約38.9キロメートル］にはクシャーニーヤ Kushaniyah もしくはクシャーニー Kushani があり、非常に人口の多いスグドの都市として記されている；その住民は裕福で、暮らし向きが良かった。ヤークートによれば、サマルカンドからわずか２リーグ［約11キロメートル］、［スグド川の］北岸に位置していたのがカブーザンジャカス Kabudhanjakath 地域で、ランジューグカス Lanjughkath と呼ばれた都市があった。それに近接して、丘陵地帯には、同じ名前の主要な町を有するウィザール Widhar 地域があり、名高い織物が作られていた。最後に、スグドのディフカーン Dihkan、つまり地方貴族であるマルズバーン Marzuban（辺境総督）・イブン・タルカスフィー Ibn Tarkasfi 地域があり、ウィザールの向こう側に位置していた。[原註466-1)]

現在ではザラフシャーン Zarafshan（「金を撒き散らすもの」）と呼ばれるスグド川の水源は、ジャバル－アル－ブッタム Jabal-al-Buttam と呼ばれる山地にあった。その場所は、一方ではスグド［諸］川、もう一方ではサガーニヤーン Saghaniyan 川とワフシャーブ Wakhshab 川の［諸］川の分水嶺となっていた。第 32 章で記述したように、この２つ［の水系］とも、オクサス川の右岸の支流である。ジャバル－アル－ブッタムの斜面は高くて急峻であるが、たくさんの村があった。ここには金と銀の鉱山があっただけでなく、鉄や水銀、銅、鉛、ナフサ、瀝青を産した。また、その地域は樹脂やトルコ石、燃やすための褐炭、そしてとくにサルアンモニアク sal-ammoniac を産した。この最後のもの［サルアンモニアク］は洞窟から噴出する鉱脈から採取され、広く輸出された。噴出口の上に部屋を建て、万一のときに閉じることができる扉と窓を取り付けてあった。；イスタフリーによれば、ここでは地中で火が燃えており、それゆえ、昼夜を問わず、煙となったサルアンモニアクの蒸気が強烈な炎のように見えていた。イスタフリーは、どのようにして、人が煙霧を部屋の中で濃縮し、定期的にサルアンモニアクを採取していたかについて記している。［部屋の中は］人を焼き尽くしてしまうほど高温であったため、人は、濡れたフェルトを身にまとって急いで中に入り、すぐにも飛び出してこなくてはならなかった。またイスタフリーは、近接する岩の多くの亀裂からもサルアンモニアクの煙霧が噴出しており、新しい人工的な噴出孔とするために［亀裂を］広げたと付け加えている。煙霧は、濃縮のために部屋に閉じ込められているときは有害であるが、丘の斜面の噴出孔に安全に近づくことは可能であった。[原註467-1)]

スグド川の水源はジャン Jan もしくはジャイ Jay と呼ばれる場所にある。そこは、ウルガル Wurghar もしくはバルガル Barghar 地域として知られており、村に囲まれた湖があった。川は、その湖から山間の谷を流れ下り、バンジーカス Banjikath に至る。その後、すでに言及したワラグサルの村に達する。それ［ワラグサル］は、地元の方言で「ダムの頭（あたま）」という意味である。というのも、ここで水が分けられ、いくつもの運河が流れ出し、サマルカンド周辺の土地と川の北岸地域の双方を灌漑していたからである。サマルカンドへ流れる運河の内、２つは船で航行できるほど大きかった；イブン・ハウカルは、これらのさまざまな水路の名称のみならず、それによって灌漑される地域や村の名称を伝えている。

サマルカンドでは、カンタラ・ジャルド

Kantarah Jard と呼ばれた石の橋が川に架けられていたが、洪水の時期には完全に水没することもあった。スグド川は、サマルカンドの下流でさらに数多くの運河が分岐し、後述するダブースィヤ Dabusiyha とカルミーニヤ Karminiyah の周辺のさまざまな地域へと流れ、その後、ブハーラー Bukhara の近郊に至った。一般的に、ここでは、主流はブハーラー川の名で知られていた。運河はブハーラーの「大壁」の外側で分岐し、壁の内側の都市の土地やその向こう側にある地域を灌漑していた。イブン・ハウカルは、さまざまな村だけでなく、これらすべての名称を記している。網状に巡らされた運河のいくつかはふたたび主流に流れ込んだが、その他のものは南西方向へと流れ、灌漑水路の中へと消えていった。ブハーラーの都市に至る主要な運河は、船が航行できるほど大きかったと記されている。[原註468-1)]

［ヘジュラ暦］４世紀（10世紀）、ブハーラーとサマルカンドの間、スグド川の南岸には重要な３つの都市があった。すなわち、カルミーニヤ（いまだに存在している）、ダブースィヤ、ラビンジャン Rabinjan である。カルミーニヤは、タワーウィースの東、「大壁」の外側、１旅程に位置していた；それ［カルミーニヤ］は、後者［タワーウィース］よりも大きく、人口がとても多く、村や肥沃な土地に囲まれており、スグド川の運河によって灌漑されていた。ヤークートは、その立派な樹木について記している。さらに、東へ1旅程には、アッ－ダブースィヤ Ad-Dabusiyah の大きな町があった。同じくスグド川の南岸から流れ出る運河沿いに位置していたが、その周辺には大きな村や属領は一切なかった。フディーマンカン Khudimankan は小さな町で、カルミーニヤから１リーグ［＝３マイル＝約 5.5 キロメートル］、幹線道路の北側、１矢ごろ離れた場所にあった。スグド川の北岸、フディーマンカンの上流１リーグ［約 5.5 キロメートル］にはマズヤーマジュカス Madhyamajkath という大きな集落があった。ハルガーンカス Kharghankath は、１リーグ［約5.5キロメートル］下流、同じく北岸、カルミーニヤの対岸、１リーグ［約5.5キロメートル］離れた場所にあった。［ヘジュラ暦］４世紀（10世紀）には、これらの３つの集落はそれぞれが金曜モスクを持つほど大きかった。また、フディーマンカンは、多くの伝統主義者が生まれた場所として有名であったと記されている。アルビンジャン Arbinjan もしくはラビンジャンは、ダブースィヤの東１旅程に位置しており、この最後のもの［ダブースィヤ］より大きな町であった；さらに東、ラビンジャンとサマルカンドの旅程の中間点、州都［サマルカンド］から７リーグ［約38.9キロメートル］にはザルマーン Zarman があった。ブハーラー近郊と同じく、ムカッダスィーは、非常に多くの小さな町の名称を挙げ、記述しているが、残念ながら、それらの位置を特定するための道程は一切伝えられていない。[原註469-1)]

南の方向、スグド川と平行して流れ、同じく沼沢地状の湖に消えたのは、現在、クシュカ・ダリヤー Kushkah Darya として知られているより短い流れである。これに沿ってシャフリ－サブズ Shahr-i-Sabz とカルシー Karshi が位置している。シャフリ・サブズ、つまり「緑の町」は、中世時代初期にはキシュ Kish（キッシュ Kishsh）として知られていた。イブン・ハウカルによれば、城砦があり、町そのものは堅固に防備が固められており、その［諸］門の外側には大きな郊外区［ラバト］があった。さらに、郊外区の外側にはアル－ムサッラー Al-Mussala と名付けられた第２町区があった。おそらく、現在、キターブ Kitab として知られている場所で、そこには宿泊所と支配者の宮殿があった。大きな市場は郊外区にあったが、牢獄と金曜モスクは内街区［シャフリスターン］にあった。これ［内街区］の大きさは１平方マイル［2.6平方キロメートル］で、住居は木材と日干しレンガで造られていた。近隣の土地はきわめて肥沃であった；ここでは暑い地域の果実がすべて栽培されており、ブハーラーへと輸出された。キシュの内街区には４つの門があり、それぞれ鉄門、ウバイド・アッラー ‘Ubayd Allah 門、肉屋の門（バーブ－アル－カッサービーン Bab-al-Kassabin）、内街区［シャフリスターン］門と呼ばれていた。外街区［ラバト］、つまり郊外区には、近隣の村に因んで呼ばれたバーブ・バラクナーン Bab Baraknan と外街区門（バーブ－アル－マディーナ－アル－ハーリジャ Bab-al-Madinah-al-Kharijah）の２つの門があった。

現在ではクシュカ Kushkah 川として知られている川の本流は、［ヘジュラ暦］４世紀（10世紀）にはナフル－アル－カッサーリーン、つまり「縮絨工たちの川」と呼ばれていた；その水源はジャバル－サヤーム Jabal-Sayam にあり、キシュの南側

を流れていた。北側にはナフル・アスルード Nahr Asrud が流れ、１リーグ［約5.5キロメートル］向こう側では、サマルカンドに向かう道がジャーイ・ルード Jay Rud と呼ばれる川を渡っていた。南側には、キシュから１リーグ［約5.5キロメートル］、バルフへの道筋にフシュク・ルード Khushk Rud、つまり「涸れ川」があった。さらにこの８リーグ［約44キロメートル］向こう側にはフザール・ルード Khuzar Rud があった。これらの流れは、キシュ周辺のさまざまな地域を潤した後、合流し、ナサフ Nasaf の都市を流れ過ぎた。キシュの領域は、どの方向にも４日行程の広さがあり、きわめて肥沃であったと記されている。近隣の山々では塩が採れ、また、タランジュビーン Taranjubin と呼ばれるマンナやフラーサーンに輸出されたさまざまな薬草が生えていた。後世になり、キシュはティームールの生まれ故郷として有名になった。ティームールは、［ヘジュラ暦］８世紀（14世紀）の後半に町を再建し、「白の宮殿」－アーク－サライ Ak-Saray －がお気に入りの住まいとなった。キシュは現在でも残っているが、シャフリ－サブズ、つまり「緑の町」という名称に変わった。

キシュのさらに100マイル［約160キロメートル］以上下流、西方には、現在カルシーとして知られている都市があり、中世のアラブ人はナサフ Nasaf、ペルシア人はナフシャブ Nakhshab と呼んでいた。［ヘジュラ暦］４世紀（10世紀）、ナサフには堅固な城砦があり、広大な郊外区が都市の外側に位置し、壁で囲まれていた。壁には４つの門、つまりバーブ－アッ－ナジャーリーヤ Bab-an-Najariyah、サマルカンド門、キシュ門、バーブ・グーバズィーン Bab Ghubadhin があった。ナサフは上述の川、つまり、キシュ地域から流れてくる数多くの流れが合流する主流の畔に位置していた。その畔のラース－アル－カンタラ、つまり「橋頭」と呼ばれる地点には支配者の宮殿があった。牢獄は支配者の宮殿に隣接しており、金曜モスクはグーバズィーン門の近く、大きな市場の街路はその間にあった。ナジャーリーヤ門のちょうど内側には、礼拝所、つまりアル－ムサッラーがあった。ムカッダスィーは、ナフシャブの素晴らしいブドウを褒め称え、その立派な市場について記している；町は肥沃な耕作地と果樹園で囲まれていたが、キシュ周辺とは異なり、中心から離れた大きな属領はなかった。

ナサフあるいはナフシャブは、歴史上、［ヘジュラ暦］２世紀（８世紀）の後半、アル－ムカンナ Al-Mukannna’－祝福されたヴェールを被ったフラーサーンの預言者－が反乱を起こし、奇跡を起こした場所として有名であった。彼が命じると、ナフシャブの井戸から月、つまりその姿が夜毎に昇り、見る者すべてを驚かせた。ペルシア人にとって、ムカンナは一般に、マーフ－サーザンダ Mah-sazandah、つまり「月を作る人」として知られている。歴史が語るように、ムカンナの信奉者の反乱は、長年にわたってカリフ・マフディー Mahdi の将軍たちの大きな悩みであった。ナフシャブの都市に関していえば、［ヘジュラ暦］７世紀（13世紀）、モンゴルの侵略の時代の後、カパク・ハーン Kapak Khan という人物が、旧町から約２リーグ［約11キロメートル］離れた場所に宮殿を建設した。モンゴル語で「宮殿」を意味するカルシー Karshi と呼ばれ、それがそのままその集落の名称となった。この集落が発展し、古いナサフ、あるいはナフシャブに取って代わった。［ヘジュラ暦］８世紀（14世紀）、この地に滞在したイブン・バトゥータはこの地に滞在し、カルシーは庭園に囲まれた小さな町であると記している。その世紀の末には、ティームールはしばしばカルシーで冬を過ごした。その後、その近くにヒサール Hisar、つまり城砦を建設した。[原註471-1)]

［ヘジュラ暦］４世紀（10世紀）以後、ナサフの近くには２つの町があり、それぞれに金曜モスクがあった。これらのうちの１つ、小さい方がバズダ Bazdah もしくはバズダワ Bazdawah である。堅固な城砦で、ナサフの西６リーグ［約33キロメートル］、ブハーラーへの道沿いに位置する。もう１つのより大きな町はカスバ Kasbah で、ナサフから４リーグ［約22キロメートル］、同じくブハーラーの方向にあり、ヤークートによれば、すばらしい市場があった。さらに、ナサフとキシュの間、後者の都市から１旅程には、ナウカド・クライシュ Nawkad Kuraysh の町もしくは大きな村があった；その一方で、ナサフの南東１旅程、鉄門への道沿いにはスーナジ Sunaj という大きな村であり、そこから１リーグ［約5.5キロメートル］にはイスキーフガン Iskifghan が位置していた。その双方の町とも、すでに言及したフザール Khuzar 川によって灌漑されていた。[原註471-2)]

スグドの自然の産物や人工的な産物は数多くある。ブハーラーのメロンは世界中で有名であるとと

もに、［ブハーラーの］織物産業は、絨緞と礼拝用の敷物、衣服用の優れた布、大きな客室に敷かれるようなやや粗い絨緞を生産していた。牢獄では鞍の腹帯が製作された；革はよくなめされ、それとは別に、さまざまな種類の油脂と油が輸出用に生産された。サマルカンドはとりわけ紙で有名であり、織物産業は、赤い布と銀爛、金襴と絹の素材を産した。また、銅鍛冶職人が非常に大きな真鍮製の器を製作し、鐙や胸繋（むながい）、腹帯、さらにはさまざまな種類の水差しと杯を製作する職人もいた。近隣の地域からは、計量できないほどの西洋ハシバミの実とクルミが輸出された。ブハーラーとサマルカンドの間のカルミーニヤはナプキンを製作し、ダブースィヤからはさまざまな種類の布と錦がもたらされた。ラビンジャンは赤色のフェルトや礼拝用のカーペット、錫製のカップを輸出していた；また、獣皮やアサの縄類、硫黄。さらにこの地域では冬季米が栽培されていた。[原註472-1)]

第30章［原書：420-432］ですでに述べたとおり、大フラーサーン道は、オクサス川をアムーヤ Amuyah でフィラブルに渡り、その後、バイカンドを通り、ブハーラーの「大壁」の門を抜ける。この州都［ブハーラー］を出ると、道はスグド川の左岸に沿ってサマルカンドまで遡り、この地域のおもな町を通り抜ける。街道のこの部分については、多少の違いはあるものの、初期のすべての地理学者が記している。イブン・ハウカルとムカッダスィーは、ブハーラーとサマルカンド地域から離れた場所に位置する町と町の間の距離について付け加えている。[原注472-2)] フラーサーンを抜けてバルフに至る主たる街道は、ティルミズでオクサス川を渡り、そこでいくつかの道に分岐し、北はサガーニヤーンとクバーズィヤーン Kubadhiyan を抜けて、ワーシュギルド Washgird に至る。北西は、ティルミズから、別の道が鉄門の方へと北へ向かい、１旅程北側のカンダク Kandak で２つに分かれる。真北へ向かう右側の道はキシュを抜け、その後、サマルカンドに至る；他方、左側の北西へ向かう道はナフシャブに至る；そこで道が分かれ、一方の分かれ道は東のキシュの方向へと向かうが、主たる道はブハーラー沙漠を横切る。これらのほとんどの経路は距離が短く、イスタフリー、また、その一部はムカッダスィーによって記されている。[原注472-3)]

フワーリズム州にあるオクサス川のデルタ地帯の土地に至るにはフラーサーン側にあるアームルから左岸を遡り、耕地が始まるターヒリーヤ Tahiriyah、そしてその後ハザーラスプ Hazarasp へと至る。この地点で道の１本が左へ向かい、ヒーヴァを通って、ジュルジャーニーヤ Jurjaniyah（ウルガンジ Urganj）へ至る。もう１本の分かれ道は、カース Kath、そしてオクサス川の右岸の町へと続いていた。これらの道は、イスタフリーとムカッダスィーによって記されている；同じく、沙漠地帯を南東へ横切り、カースからブハーラーへ至る道もまた［記されている］。さらに、［ヘジュラ暦］８世紀（14世紀）、ムスタウフィーは、ウルガンジで合流する南からの２つの経路について記している。１つはファラーヴァ Faravah（現在のキズィル・アルヴァート Kizil Arvat からウルガンジまで沙漠を北へと横切っていた；もう１つは、マルヴ Marv を出発点とし、同じく沙漠を横切り、多くの流砂を越え、最終的にはオクサス川沿いのターヒリーヤに至る。この最後の道は『ジャハーン・ヌマー Jahan Numa』にも記されている。この道は、アラブ人地理家によって記されている道とほとんど同じように、ハザーラスプからフワーリズムの州都、ジュルジャーニーヤに至る。[原註473-1)]

原註

原註460-1）Ist. 316. Muk. 261, 262, 266-268. Yam.iii. 394.

原註460-2）これ［ヌーミジカス］、もしくはヌムージカス Numujkath は、（発音区別符号の間違いによって）しばしばブーミジカスと誤記される名称の正確な読みである。Muk. 267, note b. 正しい発音は、ブハーラーを「ヌミ Numi」の名称で呼んだ中国人巡礼者によって確定される。

原註462-1）Ist. 305-309. I.H. 355-358. Muk. 280, 281. Yak. i.517.

原註463-1）Ist. 313-315. I.H. 362-364. Muk. 281, 282. Yak. i. 737, 874; ii. 952. I.B. iii.27. E. Schuyler, Turkistan, ii. 89.

原註465-1）Ist. 316-318. I.H. 365-368. Muk. 278, 279. Kaz. ii. 359. Yak. iii. 134. I.B. iii. 52. A.Y. ii. 195. Clavijo, Embassy, 169.

原註466-1）Ist. 321-323. I.H. 371-375. Muk. 279. Yak. i. 277; ii. 447, 890; iv. 234, 276, 944.

原註467-1）Ist. 312, 327. I.H. 362, 382.

原註468-1）Ist. 310-312, 319-321. I.H. 359-361, 368-371.

原註469-1）Ist. 314, 316, 323. I.H. 363, 365, 375. Muk. 282. Yak. ii. 406, 925; iv. 268.

原註470-1）Ist. 324. I.H. 375-377. Muk. 282. A.Y. i. 300, 301.

原註471-1）Ist. 325. I.H.377, 378. Muk. 282. Kaz. ii. 312. I.B. iii. 28. A.Y. i. 111.

原註471-2）I.H. 376-378. Muk. 283. Yak. i. 604: iii.197; iv. 273, 825.
原註472-1）I.H. 364. Muk. 324, 325.
原註472-2）I.K. 25, 26. Kud. 203. Ist. 334, 342. I.H. 398, 402. Muk. 342, 343.
原註472-3）Ist. 337-341. I.H. 399-403. Muk. 342-344
原註473-1）Ist. 338, 341, 342. I.H. 400, 402. Mst. 197. 198. J.N. 457.

付表 ムスリム地理家の略号と年代表

I.K.	Ibn Khurdadbih　イブン・フルダードビフ	ヘジュラ暦250年（紀元後864年）
Kud.	Kudamah　クダーマ	ヘジュラ暦266年（紀元後880年）
Ykb.	Ya'kubi　ヤアクービー	ヘジュラ暦278年（紀元後891年）
I.S.	Ibn Serapion　イブン・セラピオン	ヘジュラ暦290年（紀元後903年）
I.R.	Ibn Rusutah　イブン・ルスタ	ヘジュラ暦290年（紀元後903年）
I.F.	Ibn Fakih　イブン・ファキーフ	ヘジュラ暦290年（紀元後903年）
Mas.	Mas'udi　マスウーディー	ヘジュラ暦332年（紀元後943年）
Ist.	Istakhri　イスタフリー	ヘジュラ暦340年（紀元後951年）
I.H.	Ibn Hawkal　イブン・ハウカル	ヘジュラ暦367年（紀元後978年）
Muk.	Mukaddasi　ムカッダスィー	ヘジュラ暦375年（紀元後985年）
N.K.	Nasir-i-Khusraw　ナースィリ－フスラウ	ヘジュラ暦438年（紀元後1047年）
F.N.	Fars Namah　ファールス・ナーマ	ヘジュラ暦500年（紀元後1107年）
Idr.	Idrisi　イドリースィー	ヘジュラ暦548年（紀元後1154年）
I.J.	Ibn Jubayr　イブン・ジュバイル	ヘジュラ暦580年（紀元後1184年）
Yak.	Yakut　ヤークート	ヘジュラ暦623年（紀元後1225年）
Kaz.	Kazvini　カズヴィーニー	ヘジュラ暦674年（紀元後1275年）
Mar.	Marasid　マラースィド	ヘジュラ暦700年（紀元後1300年）
A.F.	Abu-l-Fida　アブル－フィダー	ヘジュラ暦721年（紀元後1321年）
Mst.	Mustawfi　ムスタウフィー	ヘジュラ暦740年（紀元後1340年）
I.B.	Ibn Batutah　イブン・バトゥータ	ヘジュラ暦756年（紀元後1355年）
Hfz.	Hafiz Abru　ハーフィズ・アブルー	ヘジュラ暦820年（紀元後1417年）
A.Y.	'Ali of Yazd　アリー・ヤズディー	ヘジュラ暦828年（紀元後1425年）
J.N.	Jahan Nama　ジャハーン・ナマー	ヘジュラ暦1010年（紀元後1600年）
A.G.	Abu-l-Ghazi　アブルーガーズィー	ヘジュラ暦1014年（紀元後1604年）

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（令和１年度）新学術領域研究（研究領域提案型）（課題番号18H05449）研究代表者：松原康介「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」の成果の一部である。